

平成 29 年 6 月 22 日

梅雨時の長雨と日照不足下における管理対策について

農業総合センター
専門技術指導員室

1 水稻

- (1) 茎数が少ないほ場では、引き続き浅水管理として保温に努め、分けつを促進する。
- (2) 過剰分けつを抑制するため、茎数 330 本/m²（畦幅 30cm×株間 18cm で 1 株当たり 18 本）を確保したほ場では、中干しを開始する。中干しの実施に当たっては、用水を止めるだけでなく、水尻（排水口）を低くしたり、暗渠の水甲を開けたりする等、完全に落水させるよう工夫する。
- (3) 「あきたこまち」は、早いところで 6 月第 4 半旬には幼穂形成期に到達するので、それまでに中干しを終了し、その後は間断かんがいを継続する。
- (4) いもち病の発生を助長する気象条件が続く場合、発生源となる置き苗は速やかに本田から除去する。
- (5) イネドロオイムシの発生が各地で散見されている。今後の曇雨天により発生が助長されるので、ほ場を観察して適期防除に努める。
- (6) 大雨により冠水した場合には、排水を促す。

2 麦類

- (1) 収穫適期チャートを参考に収穫適期を判定し、天気予報に注意し収穫日を逃さないようにする。明渠などを点検して、雨が止んだ後できるだけ早く圃場から排水されるようにしておく。
- (2) 赤かび病については、圃場での発生状況を確認し、圃場毎もしくは圃場内でも発生程度により刈り分けし、健全なものと混合しないようにする。
- (3) 倒伏した穂発芽が確認された圃場については、赤かび粒発生リスクも高まるため、圃場毎もしくは圃場内で刈り分けを行う。
- (4) 収穫は、穀粒水分 30%以下が原則である。やむを得ず高水分収穫となる場合には、以下の注意が必要となる。ただし、高水分収穫も穀粒水分 35%が限界である。
 - ① コンバイン収穫で損傷粒が発生しないように、扱き胴の回転を遅くして行う。
 - ② 刈り取り後速やかに乾燥機に搬入し（一時貯留は行わない）、乾燥初めの 2 時間程度は通風のみ乾燥とし、その後も通風温度 40℃以下とする。
 - ③ 高水分で収穫された麦は、ライスセンターやカントリーでは嫌うので、混乱が起きないように関係者間で十分協議を行い、生産者に対して指導する。

3 野菜

梅雨の多雨，寡日照により，品目や生育ステージにもよるが，①土壌水分過多によって根の機能が低下し，草勢の低下や立枯れを起こす，②日照が不足して光合成が充分行われなくなり，草勢の低下，生育の遅延をきたす，③高湿度や草勢の低下により灰色かび病やべと病，疫病，さび病等病害の発生が増える，等の影響が懸念される。

(1) 野菜全般

- ① 圃場周囲に明渠を掘るなど，圃場の排水に努める。
- ② 茎葉が軟弱徒長しやすいことから，施肥は控えめとし，灌水も天候を見ながら加減して過湿を避ける。
- ③ 着果過多を避け，可能な場合は早めに収穫して，株への負担を軽減する。
- ④ 抑制作型の野菜の苗床では，苗の間隔を充分に取る。
- ⑤ 軟弱な生育をしているときに，急に晴れて高温強日射に曝されると，激しい萎れを起こすことがあるので，すぐに遮光を行なえるよう準備しておく。
- ⑥ 病害虫の発生が多くなるので，適宜下葉かきを励行し，予防及び発生初期の防除を行なう。
- ⑦ 連続した降雨が予想されている場合は，雨の合間を縫って防除を実施する。
- ⑧ 薬剤散布を行なう際，軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので，登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

(2) 施設野菜

- ① 施設内で湿度の高い空気が滞留しないよう，換気に努め，可能な場合は循環扇も利用する。
- ② できる限り被覆資材（天井やカーテン）は新しいものを利用し，日照不足にならないようにする。

(3) 露地野菜

- ① 地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では高畦とし，可能な場合は全面マルチ栽培とする。
- ② 肥料の流亡が多い場合は追肥を行うが，過剰になると軟弱な生育となるので，必要最小限とする。また土壌水分が多いうちに作業すると，土壌を固結させたり，茎葉や根を損傷して病害発生を助長するので，水がはけた時に行なう。

4 果樹

(1) 曇雨天が続くので，病害の発生に注意を払い，病害虫参考防除例に準じて，雨の合間を縫って確実に防除を行う。また，病害虫発生予察情報を参考に病害虫の発生，被害防止に努める。薬剤散布を行なう際，軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので，登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

(2) 着果過多は，小玉や着色不良など品質低下を招くので，樹勢に見合った適正着果量を確保し，適正な樹相の維持に努める。

(3) 良好な受光状態の維持のため，枝葉が混み合うような場合は，誘引，芽かき，摘心など新梢管理が重要である。

(4) 多雨により湛水した場合には、速やかに溝掘りして園外へ排水する。

5 花き

梅雨の長雨により、日照時間が不足すると、品目や生育ステージにもよるが、①軟弱徒長による生育不良、品質の低下、②根腐れによる立枯れ症状の発生、③灰色かび病やべと病、さび病等病害の発生、④花芽分化・開花の遅れによる需要期・計画出荷への影響等が懸念される。

(1) 花き全般

- ① 茎葉が軟弱徒長になりやすいことから、施肥量に留意するとともに（多肥は控える）、灌水も控えめとする。
- ② 日長により花芽分化や開花に影響が大きい品目では、花芽分化の状況を確認するとともに、開花調節（キクの電照等）を行っている場合は、品目・品種に合わせた管理・調整（消灯時期の調整）を徹底する。
- ③ 病害虫の発生が多くなるので、発生状況を観察し、防除を徹底する。連続した降雨が予想されている場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。
- ④ 薬剤散布を行う際、軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

(2) 施設花き

- ① 長雨が続く場合、施設内への雨水流入や地下水位の上昇を防ぐため、周囲に暗渠や明渠を設け、排水対策を行う。
- ② できる限り被覆資材（天井やカーテン）は新しいものを利用し、日照不足にならないようにする。
- ③ 多湿条件になると病害が多発するため、ハウス内が過湿にならないように、換気を十分に行い（可能な場合は循環扇の利用）、防除を徹底する。

(3) 露地花き

- ① 排水対策として、ほ場周囲に暗渠、明渠を設置し、ほ場内に雨水が停滞したり、冠水しないように注意する。地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では、高畦栽培が効果的である。
- ② 湿害により、根の活性が低下すると、生育・品質に影響が出るので、状況に合わせて葉面散布を実施し、生育・樹勢の回復を図るとともに、肥料の流亡が多い場合は、追肥を行うとともに、適宜防除を行う。
- ③ 長雨・低日照後の強日射は、株の萎凋や葉焼けの発生が懸念されるので（特にグラジオオラス）、寒冷紗等による遮光の準備をしておく。

6 畜産

梅雨は高温多湿や細菌等の影響により、家畜のストレス増加による生産性の低下をまねきやすいため、畜舎の通風を確保するとともに衛生的な飼養管理に努める。

(1) 畜舎の通風と乾燥を確保

畜舎内の通風を確保することで、湿った空気や空気のよどみの改善に努める。また、畜舎消毒を実施する際は、効果が発揮できるよう畜舎清掃作業後に実施する。

乳牛の場合、汚れた敷料に加え高温多湿な条件は細菌の増殖に好都合となり、乳房炎を誘発し、生乳中の体細胞数の増加につながる。こまめな除ふん作業の実施及び清潔な敷料を確保し、乾いた牛床及び清潔な牛体に心がける。

(2) カビを発生させないための飼養管理の注意点

飼料保管庫及び飼料タンクの清掃・乾燥を十分行い、カビ発生等による飼料の変敗に注意する。

- ① 日中に暖められるとタンク内が結露するため、飼料タンクを遮光するか防曇塗料を塗り、ひび割れ、結露、飼料の変敗等がないかこまめに確認する。紙袋飼料は冷暗所で保管する。
- ② 飼料は適量を補充し、必要以上に長期間タンクで保存しない。
- ③ 飼槽の残飼、エサ箱にこびりついたエサはこまめに清掃し衛生管理に留意する。